

志垣澄幸歌集

『鳥語降る』

(本阿弥書店)

本歌集をひと言で表すなら「懐古」と「回顧」の歌集と言えよう。貧しくも心豊かに過ごした日々を懐かしみつつ、学童期に体験した戦争を顧みる。過去と現在を織り交ぜながら、読者に多くのメッセージを伝え、今を考えさせる歌集でもある。

昭和の子われも弟も夏の日は川にもぐりて魚を獲りにき

空を見ることがなくなりし少年らてのひらの中の世界のぞきて

自然の中で遊び呆けた昭和の少年らと、もう空さえ見ない現代の少年たち。

どの家にも神や仏がおはせしに平成の世になりて消えたり

親殺し子殺し安易に人を殺すこれがいまの日本人です

どきりとする歌ではある。いつから日本人は人の心を失くしてしまったのだらうか。

平和あればつづきに戦争のあることをゆめ忘るなよ木々芽ぶく春

平和に慣れた私たちはその対義にある戦争を忘れてるのではないか。戦争を知る者からの警告である。(海老原光子)

谷川由里子歌集

『サワーマッシュ』

(左右社)

一度目に読んだときは、世界の隅々まで行き渡るそのときめきに、二度目に読んだときは、ときめきを裏打ちする意識のありように吸い寄せられた。

月がひかつてる月がひかっているチャンスを棒に振るようになきで

愛してる・シー・ユー・レイター・また明日 天気がよければ笑ってほしい

月や天気のこと。それらへの思いだけで一首は満ち足りている。チャンス捨てて、誰かに笑ってほしいと願う心。澁のないあ

かるさに、かえって不安未満の不安を感じるのには深読みだらうか。

ああよかった。どこにいても月がみえる。悲しみが色めき立つのがわかる。

はしゃいでもはしゃいでも追いつけない頭の中の駆ける花野に

韻律を揺るがすことで、一首のなかの感情も捉えどころのないおもしろく不思議な揺らぎを見せる。安心と不安、ときめきと

怯え。両者の不均衡こそ作者の心の本当がきらめいているように思う。

話題の第一歌集。(小島 なお)

平岡直子歌集

『みじかい髪も長い髪も炎』

(本阿弥書店)

この世と自分との境界線が痛む。自分の魂の容れ物でもあることに違和感がある。言葉は作者の内部に棲んでいるのか、それとも外部からのいつときの借り物なのか。そんな問いを突きつけられている感じがした。そして、短歌の定型そのものにも疑義を差し挟むような印象。

あなたはあなたの脳と生きつつ地下鉄ですこし他人の肩にもたれた

さみが思うわたしの顔をおもうときそこにはぼっかりあく空洞の

どこまでが「あなた」で、どこからが「あなたの脳」なのか。「わたしの顔」と

「さみが思うわたしの顔」は違うのか。哲學的な考察を含みつつ、言葉の象徴性と格闘する。だから万人にわかるように作られていない。そこがもったいない。

身のうちに電子回路や針金を感じつつ

さみに腕を伸ばした

そんな繊細な作者が感じ取ったナマの言葉たち。おずおずとこの世に手を差し出す刃としての定型。その鋭さに大いに戸惑う

愉悦を感じた。(大松 達知)